

地域づくりに求められる人材について
～図書館の調査から探る～

情報・広報グループ	赤松 亮
移住交流推進課	前田 岳
企画グループ	横山 千秋

目次

1	はじめに	1
2	調査について	2
	(1) 目的と概要	
	(2) 調査先について	
	(3) 調査手法について	
3	調査内容	2
	牧之原市立図書交流館いこっと	2
	(1) 静岡県牧之原市の概況	
	(2) 取組に至った経緯	
	(3) 図書館の工夫	
	(4) 今後の課題、展望	
	NP0 法人情報ステーション	6
	(1) 千葉県習志野市の概要	
	(2) NP0 法人情報ステーションについて	
	(3) 民設民営の図書館について	
	(4) 今後の展望	
4	まとめ	8
	(1) 2 事例の共通点	
	(2) 地域づくり人材に求められる要素	
5	おわりに	9

1 はじめに

2019年6月に公布された地域の自主性及び自立性を高め、改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律（第9次地方分権一括法）によって、公立社会教育施設（博物館、図書館、公民館）について、地方公共団体の判断により教育委員会から首長部局への移管が可能となった。この法律の成立に合わせて、地方教育行政の組織及び運営に関する法律が改正され、図書館を含む特定社会教育機関を首長が所管することが可能となった。社会教育の振興の目的に文化・観光振興や地域コミュニティの持続的発展が含まれることとなり、社会教育施設をまちづくりやにぎわい創出に積極的に活用することが期待される。

社会教育施設のなかでも特に図書館は、住民等が調査研究、情報収集をするために活用する頻度が高く、最も身近にある社会教育施設である。図書館は「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設（「図書館法2条」）」と定義され、社会教育の精神に基づいた地域の知の拠点としての役割が前提とされている。デジタル化の進展で情報へのアクセシビリティが向上したことにより「図書館不要論」が起きているが、このような状況下でも図書館の数は増加傾向にある。

「日本の図書館 統計と名簿 2020」¹によれば、1990年の図書館数1,928館に対して2020年の図書館数は3,316館となっている。図書館数の推移を観察すると、2014年に一度減少に転じた以外は増加し続けた。また、個人貸出登録者数、団体貸出登録数も増加している。2020年の個人貸出登録者数は58,041千人、団体貸出登録数は214,632団体となり、1990年と比較すると、個人貸出登録者数は3.5倍、団体貸出登録数はおよそ7倍になっている。図書館数と利用者数をみれば、図書館は不要になるどころか社会にとってより必要とされる存在になっており、その中で特色ある図書館が次々に登場している。

例えば、公共図書館と民間書店との機能が混在する武雄市図書館（佐賀県武雄市）、「図書館」「市民活動支援」「生涯学習支援」「青少年活動支援」の4種の機能を兼ね備えた武蔵野プレイス（東京都武蔵野市）、ハローワークや医療相談といった住民サービスを兼ね備えた鳥取県立図書館（鳥取県）や千代田区図書館（東京都千代田区）などである。

いずれも、図書の貸出以外のサービスを有し、多くの目的に対応する場として機能しており、より多くの人が集える場であることが特徴である。この特徴は、冒頭に記載した第9次地方分権一括法の趣旨に追加された文化・観光振興や地域コミュニティの持続的発展にも符合する要素だといえる。そこで、多様な目的に対応し、人が集える場として機能する図書館には、地域コミュニティを持続的に発展させる手法やその手法を運用する人の存在があると考えた。地域コミュニティをいかに持続的に発展させるかは、地域社会をいか

¹ 著者・編者：日本図書館協会図書館調査事業委員会日本の図書館調査委員会編
発行：日本図書館協会 発行年：2021.05

に育むか、つまり、地域づくりをいかに進めていくかという問いに直結する。以上を踏まえ、本調査は、図書館に焦点をあて、その背景にある地域づくり人材に求められる要素を調査するものである。

2 調査について

(1) 目的と概要

本調査は多様な目的に対応し、人が集えることを目指す図書館に焦点をあてることで、地域づくり人材が備えるべき要素を明らかにすることが目的である。令和3年12月から令和4年1月にかけて調査先へのヒアリングを実施した後、調査内容を分析、検討した。

(2) 調査先について

図書館の設置区分は、国や地方公共団体が設置する「公設」と民間事業者やNPO法人が設置する「私設」があるが、調査対象を広く捉えるため、公設・私設いずれも対象としている。開館間もない民間施設を活用した静岡県牧之原市立図書交流館「いこっと」と、図書館拠点を複数展開している千葉県船橋市を拠点とするNPO法人情報ステーションが運営する千葉県習志野市袖ヶ浦団地まいぷれ図書館を調査先として選定した。

(3) 調査手法について

新型コロナウイルス感染症の影響も考慮し、現地視察およびWEB会議システムZoomを用いて、担当者へヒアリングを実施した。

3 調査内容

牧之原市立図書交流館いこっと

(1) 静岡県牧之原市の概要

静岡県牧之原市は、平成17年10月に榛原郡榛原町と相良町が合併して誕生した静岡県中部に位置する人口43,936人（令和3年12月31日時点）の市である。沿岸部に住宅地、山間部に農地が広がっており、市域の外周部には富士山静岡空港、御前崎港、東名高速道路相良牧之原ICなどの陸・海・空のインフラが整備されている。

(2) 取組に至った経緯

「牧之原市立図書交流館いこっと」（以下「いこっと」という。）が開館するまでは、市内には、庁舎の一部を間借りした学校教室一部屋分程度の小規模な相良図書館（89㎡）と榛原図書館（165㎡）、それに移動図書館（バス1台）しかなかった。一方で、市民活動として図書の読み聞かせボランティア団体（約20団体150人程）が図書を活用した活動を積極的に行っており、市民からは、憩いの場となる新しい図書館の整備が長く切望されていた。市は、どのような図書館が住民に必要なのか、市全体でビジョンを共有すべく平成30年12月に学校教育関係者、家庭教育に資する活動を行う者、学識経験者や市民か

らなる「牧之原市図書館協議会」を設置し、令和元年8月に「ささえ つくり つなぐ 牧之原市の図書館」を基本理念とする「牧之原市立図書館基本計画」を策定した。基本計画には市民から約170の意見が寄せられ、期待の大きさがうかがえた。

そのような状況の中、令和元年9月に牧之原市役所相良庁舎から西に約500m、国道473号の西側に位置する、ミルキーウェイショッピングセンターの中核店舗であるホームセンター（敷地面積：約2,400 m²）が閉店した。ショッピングセンターの建物の所有者は、テナントがいつ埋まるか分からないという不安があった。一方、市側には若者が魅力を感じるサービス向上の必要性があるものの、図書館を新たに建設すればで財政が圧迫されてしまうという懸念があった。そこで、公と民が互いに協力し公民の垣根を超え、ショッピングセンター内に滞在型かつ市民満足度の高い場所を創設することで合意した。その後、「民」は施設の躯体補修と同一フロア内のテナントの整備を行い、「公」は「学びと交流の拠点」を整備することとなった。そして令和3年4月17日に面積815 m²、蔵書数4万冊、席数80席のいこっとが開館した。

(3) 図書館の工夫

○施設の概要

牧之原市は図書館基本計画の構想と図書館協議会の方針をもとに、図書館を中心市街地の賑わい拠点と捉え、「図書」を「ツール」とした人と情報の「交流」を目的とした施設として、図書館を「図書交流館」と位置付けた。

いこっとは、「交流」を目的とする場所であるため、従来の図書館とは異なる工夫が施されている。

まず、いこっとを含むミルキーウェイスクエア施設全体の工夫があげられる。鉄骨平屋の2,400 m²程度の空間に対して、約1/3を市が使用し、残りの1/3は地域の民間テナントに小割りに貸し出さ



図1 図書交流館いこっと館内の様子

れ、残りの1/3が共有スペースとなっているが、契約管理上、官と民の境界は明確に区分されている。一方で、来館者にこのことを感じさせないよう、図書交流館と民間施設との間に、境目がなく（壁が無い）、だれもが双方を気軽に行き来できるようになっている。また、館内には音楽が流れ、交流・談話エリアでは、会話や飲み物の持ち込みを許可している。施設内であれば、後述する図書交流館外のエリアにあるカフェ等で図書交流館の本を読むことができる。その他、母親が読み聞かせをできるスペースを設けた児童エリア、

静かな空間を確保した学習室などを備えている。天井の下地や空調配管がむき出しのスケルトン構造は図書館を感じさせない斬新なデザインであり、図書の貸し借りだけでなく、人と会う、自分の時間を楽しむなど、多くの人に居場所として利用してもらうための工夫が施されている。

また、いこっとが入っている施設内には、カフェ、ボルダリング、レンタルキッチン やレンタルバイクなど、従来の図書館にはない設備があり、レンタルスペースでは、各種イベントを行うことができる。



図 2 民間のレンタルバイクエリア付近に設置された図書

○図書をツールとした取組（地域住民との関わり）

いこっとでは施設内での工夫だけではなく、図書をツールに様々な方法で地域住民とつながっている。

■小中学校との交流

いこっとの開館準備期には、地元中学校の生徒会が自主的に手をあげて、生徒達による「本のクリーニング」や「記念缶バッジの製作」が行われた。また、開館後は小学校への出張授業や、いこっとへの館内見学が積極的に行われている。その結果、児童の要望により、小学校の総合学習の時間で「いこっとの周知方法」や「いこっとを核とした魅力あるまちづくり」について学習している。

■ボランティアとの交流

いこっと開館準備の際には、住民の申し出により「開館ボランティア」が組織され、開館までの数か月間に渡り、本の配架作業が行われた。また、この機運を活かし開館後はいこっとの運営サポーターを募集している。

■企業との交流

「雑誌スポンサー制度」を実施している。これは民間企業などが雑誌の購入費用を負担し、雑誌の最新号に透明のビニールカバーを掛け、表面に「スポンサー名称」、裏面に「事業広告」を掲載する制度である。配架されている雑誌の約4割にこの制度が活用されており、図書交流館の書架のバリエーションを増やす重要な施策となっている。今後はいこっとで開催するイベントにスポンサー企業から講師やトークゲストを招くなどして、市民と地元企業の交流を増やす予定である。

■その他の交流

牧之原市の他課と協力して月ごとにテーマに沿った展示をしている。例えば、健康推進課との連携展示では「牧之原市民の”生きる”を支える」をテーマに展示を行った。これには情報発信の目的だけではなく、図書をツールにして市内での横のつながりを築く狙いもある。また、図書交流館の壁の一部にお茶の葉を使用し、牧之原市のお茶に特化した展示スペースも設けられている。このように、いこっとは地域との様々な交流機会を持っている。この交流機会を生むために重要な役割を果たしているのが、牧之原市図書館協議会である。

図書館協議会は、図書館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、図書館の行う図書館奉仕につき、館長に対して意見を述べる機関（図書館法14条2項）である。牧之原市図書館協議会を構成するのは、図書館運営に関する学識経験者、この地域で学校教育や社会教育に携わる者、地域活動に従事する者、そして、市民である。運営に専門的知識を要する図書館であるから、学識経験者を置くことは自然なことといえるが、牧之原市図書館協議会の特色としては、この地域で学校教育や社会教育、地域活動に従事するプレーヤーを構成員に迎えている点である。また、構成員の年代も、一定の年代に偏ることなく、多世代の意見をうかがえる年齢構成になっている点も特色である。この地域で暮らし、活動をする者が構成員の多くを占め、また、その年代も幅広い年代に渡ることから、交流の機会や新たに活動を共にするキーパーソンを見出しやすく、図書館の場づくりに地域住民の意見を吸い上げやすい構造にしているといえるだろう。

(4) 今後の課題、展望

令和3年4月17日のいこっとオープン以来、年間の目標来館者数5万人(旧相良図書館1万2千人)に対して、令和3年12月時点で約8万7千人の来館者数を記録している。予想される令和3年度の最終来館者数は約11万人であり、担当者の予想をはるかに上回る数値であった。予想以上の来館者数となっているにもかかわらず、図書交流館に対する苦情は担当者の想定よりもかなり少ない。従来どおり図書館には「静寂」を求める利用者から、音や飲食に関する意見が多く寄せられると想定していたが、実際にはいこっとの開放的な空間に対して、好意的な意見が多く寄せられている。これに対して、担当者は、利用者が上手く目的別に図書館を区別しているのではないかと予想している。

これらの結果は、図書館創設の際に、公民が連携して図書館の方向性を決定してきたからだと考えられる。また、相良図書館では来館者1人当たりの貸出冊数が平均2.06冊に対して、いこっこの利用者は平均0.69冊と少なく、来館者が本を借りる以外の目的で、いこっとを利用していることが窺われる。

いこっこの開設されてから数カ月経過し、順調なスタートを切っているが、市の最終的な目標は「公民が連携して魅力あるサービスの創出・提供の拠点となり、豊かな暮らしを実現し、人口減少に歯止めをかけること」だ。担当者は今後、いこっこの市民にとって利用しがいのある場所であるという認識をいかに定着させるかが重要だと考えており、「市民に愛され、市民が育てる施設」を目指している。

NP0 法人情報ステーション

(1) 千葉県習志野市の概要

千葉県習志野市は、東京から約 30 キロメートル圏内に位置する人口 175,372 人（令和 3 年 12 月 31 日現在）の市である。古くは、騎兵連隊・鉄道連隊が置かれるなど軍事都市として発展してきたが、昭和 40 年代から 50 年代にかけては、高度経済成長と首都圏の人口急増などを背景に、袖ヶ浦団地、秋津団地などの大型団地が建設され、東京のベッドタウンとして発展している。

(2) NP0 法人情報ステーションについて

NP0 法人情報ステーション（以下「情報ステーション」という。）は、「民間図書館やイベントなどを通じて地域住民同士の交流を活性化させ、地域全体の活性化を図ること」を目的とし、平成 16 年 8 月に船橋市で当時大学生であった代表理事の岡直樹氏らによって設立された団体である。民間図書館を通じたまちづくりを主軸とし、地域イベント開催のサポートを行っている。できるだけ補助金や助成金に頼らず、事業活動に伴う収入で必要経費をまかなうという経営理念のもと活動を続け、令和 3 年度で 18 年目を迎えており、平成 28 年には総務省のふるさとづくり大賞を受賞している。

情報ステーション設立のきっかけは、岡氏の実体験に起因している。船橋市から都内の大学に往復 4 時間ほどかけて通学しており、移動時間を図書館で借りた本などを読む時間に充てていたという。授業の関係で、図書館の閉館時間である午後 7 時までに船橋に戻ることが難しく、新しい本を借りたくても借りられないことを不便に思い、「遅くまで開いている図書館が欲しい。ないなら作ればよい。」という考えから設立に至った。

(3) 民設民営の図書館について

情報ステーションが設置・運営を行っている図書館は、図書館法上に規定されない、民設民営の公共図書館であり、令和 3 年 12 月末時点で千葉県を中心に全国で 116 館（うち 49 館は閉館。既存館 67 館。）に及ぶ。特徴としては、全館で統一した蔵書を持つこと、利用者の貸出情報などを分析したうえで、毎月図書館の蔵書の入れ替えを行うことがあげられる。また、商店街の空き店舗や空き家、商業施設、老人ホーム、マンションの共有部などのスペースに本棚を置き、地域住民などから本を寄贈してもらい、近隣から募ったボランティアによって図書館の管理・運営を行っている。本の配架方法や昨今のコロナ禍における図書館の開閉時間や休館日については各館ごとに判断しており、それぞれの図書館の特色を出しやすい運営形態となっている。また、単に本を借りられるだけでなく、座っ

て話や作業のできるスペースを備えており、図書館内でヨガなどのイベントを行うこともできる。

今回、視察した袖ヶ浦団地まいぷれ図書館は、情報ステーションが設置・運営を行っている図書館のうち最大規模の情報ステーション直営の図書館であり、平成23年3月に袖ヶ浦団地の中にある袖ヶ浦ショッピングセンターの空き店舗を活用して開館した。蔵書数は約7,000冊、開館時間は日曜日を除いた午前11時から午後5時まで、利用者登録をすれば誰でも2週間の貸出期間で2冊まで借りることができる。蔵書は他の館同様に寄贈されたものが主であるが、利用者のニーズを考慮し、1タイトルにつき1冊ではなく、複数配架されている。公立図書館では、最新のものや人気作品は借りようにも予約待ちの状況であることも多いが、このように複数配架することによって、極力短い待ち時間で利用できるようにしている点も特色である。情報ステーションが運営する他館同様に人が集まれるスペースを準備しているのも特色だ。館内中央にある大きな机は、一見、閲覧用の席にも見えるが、ここは配架手続き待ちの書籍置き場となっている。このスペースは配架手続きや蔵書整理作業の中心の場となっている。来館者もこの配架待ちの書籍を見て、館員に声をかけるなど、この場がコミュニケーションの出発点になっている。

視察の際に、貸出ボランティアをしていた男性はオープン時からの関わりのある方で、「寄贈本来だよ」と楽しそうに報告をしながら配架手続き待ちのスペースに本を並べていた。本の並び順について伺った際にも「50音順だよ」と言葉は短かったが、図書館に愛着と誇りをもっているような印象を受けた。自分の居場所があり、本の貸し借りというやるべきことがあり、家族以外との交流が継続的にできることもボランティアのやりがいにつながっているのではないかと思える場所であった。

これらのことから、「本」というツールを用いて、地域みんなが本を持ち寄り、みんなで協力し、みんなで作る地域の交流空間になっているといえる。



図3 袖ヶ浦団地まいぷれ図書館



図4 蔵書の一部

(4) 今後の展望

今後の展望について、情報ステーションの岡氏から図書館開設の視点と人材活用の視点からお話をいただいた。

まず、図書館開設については、空き家再生事業を行う一般社団法人地域力研究所（以下「地域力研究所」という。）が令和元年9月に設立され、ハード面は地域力研究所が支え、民間図書館事業のソフト面を情報ステーションが支える仕組が構築された。新たに図書館を作るのではなく既存の建物を活用し、日常の動線上で気軽に立ち寄ることができる場を緩やかに増やしていきたいという。令和4年秋ごろには廃校となった小学校を利用した図書館を開館することだ。こうした取組が広がることで、地域の交流施設としての図書館の可能性が広まるとも語っていた。

また、わざわざ来てもらうのではなく、ふらっと立ち寄れる場所として頭に浮かぶような場所を目指している。

人材活用の視点では、ボランティアの中に軽度の障がいがある人がいるため、蔵書を扱う流通拠点において福祉作業所のように、多くの人の活躍できる場を作りたいとの思いがある。障がいのある人を社会とのつながりの場や必要な支援につなぐことができたこれまでの経験からこの構想が浮かんだという。誰もが、生きがいややりがいを持って楽しみながら地域と関われる場として民間図書館は存在し、これからの時代において必要とされる場であると感じられた。

4 まとめ

(1) 2事例の共通点

昭和の時代の図書館には、「静粛に」という注意書きがあった。図書館には静寂が求められ、利用者はその条件をのむ形で図書館を活用していた。しかし、いこつとでは、館内に軽快なBGMがながれ、併設された民間施設から賑やかな声が聞こえてくる、およそ静寂とは真逆の環境があった。学習スペースこそ壁で遮蔽され、静粛を求める空間であるものの、館全体として雑音を許容する空間設計になっており、会話や活動が発生する仕組みとなっている。また、情報ステーションの運営する袖ヶ浦団地まいぶれ図書館でも利用者とボランティアスタッフとが歓談し、まるで井戸端会議場のような光景があった。かつては利用するために静粛さという制約を受け入れるべきだったが、より制約の少ない、開かれた場として機能している点に2事例の共通点が見いだせる。開かれた場は「堅苦しくない公共的な集まりの場であり、住民がいつでも誰でも自由にアクセスでき、会話できる場」がある図書館として、生活、職場に続く「第三の場（Third Place）」であるといえるだ

ろう。

(2) 地域づくり人材に求められる要素

住民がいつでもだれでも利用できるというような多目的で開放的な場では、利用者が持つ目的同士が衝突することもあるだろう。この開放的な空間を持続的なものとするためには、空間設計だけでは難しいという課題がある。そこで重要となるのは、その場と利用者を仲介する人の存在である。

いこつには、地域情報に精通し、小中学校やボランティア、企業との交流を持続させる図書館職員の存在があった。また、情報ステーションの担当者は、地域住民から運営ボランティアを積極的に募るだけでなく、図書館の運営スキームを独自で設計し、既存建物を図書館として活用するために空き家再生事業団体を立ち上げることで、日常の動線上に誰もが気軽に立ち寄れる地域交流空間を数多く展開することに成功している。もっとも、高度に専門的な知識は場と利用者を仲介するうえで必ずしも必要ではないだろう。なぜなら、そのような専門知識は属人的である場合が多く、場の持続にとっては阻害要因になり得るからである。仲介者となる図書館職員や担当者は変わる可能性が高い。そこで重要になるのが、専門知識や経験を備えた仲介者ではなく、場と利用者をつなぐ素養を習得できる者である。

調査した2事例の職員や担当者は図書館の利用促進をSNSなどに頼らず、クチコミを重視し、図書館に興味を抱いてもらえるような企画設計、地域住民への図書館運営参画の呼びかけすることで利用者を増やしたり、持続的な場の運営に成功している。専門知識や図書館運営の事務を機械的に処理する能力以前に、地域のヒト・モノ・コトをつなぎ合わせる素養を確実に備えていることがうかがえる。仲介者が図書館という場と人をつなぐ経験を重ねることで育まれる地域のヒト・モノ・コトをつなぎ合わせる素養こそが地域づくり人材に求められるものではないだろうか。

5 おわりに

本調査では、多様な目的を許容し、人が集える場として図書館が機能するには地域情報に通じ、地域のヒト・モノ・コトをつなぎ合わせる仲介者の存在が必要であることがわかった。人が集える場としての図書館には、地域コミュニティの持続的発展につながる手法やその手法を運用する人の存在があるという点を考えると、地域づくりに携わる人材が備えるべき能力とは地域情報に通じ、地域の多様な資源を編む、仲介者そのものになる、ということであろう。今後、私たちが考えなければならないのは、どのようにしてこの仲介者になるのか、という点だ。そこで、私たちが念頭に思い浮かべたのは、地域活性化センターが掲げる「未来構想と三つの物語」の「三つの物語」である。

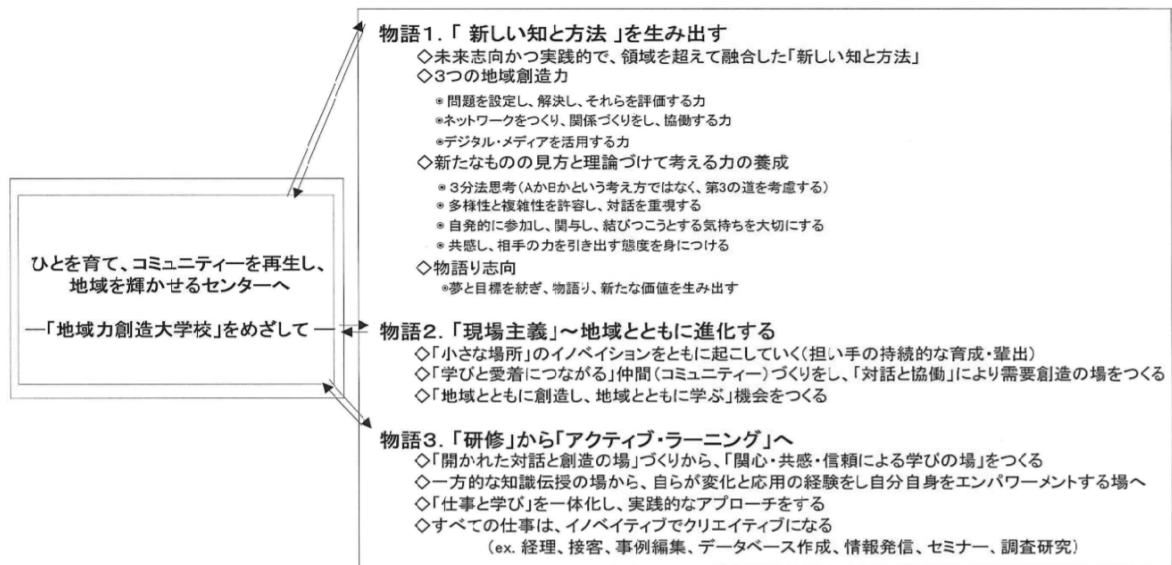


図5 地域活性化センター「未来構想と三つの物語」

繰り返すように、地域に集まる人は多様であるからこそ、その場で起きうる課題は多岐にわたる。そして、その課題を解決する絶対的な正解もわかり難い。そこで、既知の知識を組み合わせ、未知の手法を創り出すというような、目の前で起きる物事を広く許容する態度が必要である。「三つの物語」の「新たな知と方法を生み出す」「現場主義～地域とともに進化する～」「「研修」から「アクティブラーニング」へ」という3つのテーマは、多様なヒト・モノ・コトを許容する態度、言い換えるならばオープンマインドを育むために欠かせない視点である。地域づくりの現場で、この視点を保ちながら、地域が求める人材となれるように研鑽を重ねていきたい。

最後に、本調査報告書の作成にあたり、牧之原市立図書交流館「いこっと」館長の杉村明彦様、司書の水野秀信様、NPO 法人情報ステーション代表理事の岡直樹様にはご多忙のなか取材にご協力いただいた。心より感謝申し上げる。